

秋期福音特別集会（3）（大阪）

旅路——わが旅路（過去・現在・未来）——

—— 詩篇第84篇 ——

1978年11月5日

小池辰雄

世界歴史は神の旅路 入信以前 第1期（大手町時代 1923～） 第2期（新町時代 1925～） 第3期（丸の内時代 1930～） 第4期（家庭集会 1940～） 第5期（聖霊時代 1950～） 第6期（アナテマ時代） 第7期（著作集出版 1975～） 第8期（詩作 1979～） 第9期（詩『神の幕屋』出版） 詩篇84篇 「人生の歌」（ロングフェロー）
生きる望み 聖霊の幕屋 旅は道伴れ世は情け

【詩篇84】 ギテトの琴にあわせて伶長にうたわしめたるコラの子のうた

1 万軍のエホバよ、

なんじの帷幄はいかに愛すべきかな。

2 わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大庭をしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ぶ。

3 誠やすめは窩をえ、

燕子はその雛をいるる巢をえたり。

万軍のエホバ、わが王、わが神よ、

これなんじの祭壇なり。

4 なんじの家にすむものは福いなり。

かかる人はつねに汝をたたえまつらん。

5 その力なんじにあり、

その心シオンの大路にある者はさいわいなり。

6 かれらは涙の谷をすぐれども、

其処をおおくの泉あるところとなす。

また前の雨はもろもろの恵みをもて之をおおえり。

7 かれらは力より力にすすみ、

遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ。

8 万軍の神エホバよ、わが祈りをききたまえ。

ヤコブの神よ、耳をかたぶけたまえ。

9 われらの盾なる神よ、

みそなわしてなんじの受膏者の顔をかえりみたまえ。



10 なんじの大庭にすまう一日は千日にもまされり。

われは悪の幕屋におらんよりは寧ろ

わが神の家の門守とならんことを欲うなり。

11 そは神エホバは日なり盾なり。

エホバは恩恵と栄光とを与え、

直くあゆむものに善物をこばみたもうことなし。

12 万軍のエホバよ、

なんじに依頼むものはさいわいなり。

●世界歴史は神の旅路

「旅は道づれ」に私は、

「世界の歴史は神の旅路である」

と真つ先に書きました。神様の歴史、人類の歴史はその専ら大きな意味で神の歴史であります。神の歴史を蔑ろにしている人類は、大方の人たちは神を無みする。これは一番大きな罪です。それは滅びるよりか仕方がない。神様はブロークン〔破壊〕に絶え難い。滅びゆくのに絶え難い。

「なお忍んで一人でも救われんことを待つ」

と、ペテロが書簡の中で書いていますが、だから審判はのぼしておられる。万人救済の悲願を持つておられることも、これも聖書の中にあります。ところが、世界の歴史は、特に20世紀の歴史は、まかり間違えば「第三の禍」がやって来る。第三の禍というのは黙示録にもある通り、藤井先生が『羔の婚姻』という偉大な詩を書かれて、未完成で終りましたが、その机の上に残っていた最後の一枚、そこに、

「第三の禍が来たらば、世の人たちは嘆き齒噛みすることあらん」

という句で終っている。非常に深刻な預言のように響きます。我々にとって20世紀における第三の禍というのは第三次戦争、それが来ないことを望みますが、どうも武器を捨てることができないわけです。いよいよ恐ろしい武器が秘かに考えられ、造られている。見えないような空間を宇宙飛行しているところの妙な衛星は、軍事的に使われている。全く人間というのは救い難くできている。お釈迦さんやキリストが現われて来たのは全くそのわけです。

今、霊的人格が暁の星よりも少なくなってしまった。あなた方が霊的人格、人物として是非ともこの滔々たる逆流に棹さして行かなければ。これは如何にして可能であるか。ただ聖霊のみ。キリストの霊を戴けばそれができる。どのような運命、環境にも勝ってゆることができる。そういう事で進んでゆきたいと思えます。



●入信以前

私の話はいろいろに飛びますから、そのつもりで聞いてください。先ず個人的なことか
ら言います。この私の人生の旅で今日あるは、もう御存知の通り、27歳〔数え年〕を一期と
して天界に往きました兄〔小池政美、1895/7/15～1921/9/22〕です。北京で腸チフスで、公
使館の職員でしたが、仆れてしまった。しかしながら、彼は仆れたのではなく、その死ぬ
少し前に、白衣のキリストが現われてきたので、

「イエスさまが迎えに来られましたので、お先に失礼します」

と、これは母に言った言葉です。兄が死をもつて私に福音の道を示してくれた。道標とな
った。第一の道しるべは私の兄貴がしてくれた。彼の終りの数年間というものは内村鑑三
先生に学んだ大学時代、またそれから後、数年間、ガラリと変わった。藤井先生にも親し
く導かれました。藤井先生は、

「小池君の兄さんは一人に一人いるかいけないかという人だったよ」

と言われた。私は忘れることのできない言葉です。

私はこの兄貴の死を徒らにするわけにはいかない。まあそういうことで弔合戦をしてい
るわけです。それにしてもあまりにも情けない弟ですが。

あれは私が中学の5年の時、受験準備の時です。私は一高〔旧制第一高等学校〕に入りたかつ
た。けれども、伯父さんのやつかいになっているから、落つこちでは悪いから水戸〔旧制
水戸高校〕に行きました。正直、トップ級で入ったものだから、一高にも入れたので非常に
くやしかったけれども。本当に石にかじりついてもと、死にものぐるいで勉強したよ。私
は水戸に入ったんだけど、そこで病氣にかかってしまった。これは私自身が悪かった。
それで死ぬか生きるかということで、病にかかって、高校で骨皮筋衛門になってね、胃腸
をこわして50メートル位歩くときたびれてしまっただね。

●第1期（大手町時代 1923～）

まあやつと歩けるようになって、それで兄貴の『宗教と現世』という内村先生の本を読
んで——それに兄貴のラインが引つ張つてある——私は共感をもつてこれを読んだ。私は
単純なもんだからすぐその世界に引き込まれた。それからもう内村先生の話を聞きに往こ
うと、最初に出かけて行つたわけです。これは内村先生への兄貴の天界からの導きであつた。
それが私の信仰の第1期です。内村先生の話を聞いた大手町の集会〔1923/2/25〕。この最初
は『キリスト道』〔曠愛新書第6号、1967年刊〕に書いてある通りです。

「わが魂を愛するイエスよ」

この讃美歌（273B）がその時に歌われた讃美歌でね、それを聞いていて涙が出た。

「福なり、心の貧しき者は、天国は其人の有なれば也」

こういう短冊が二つ書いてあつた。これが大手町で聞いた最初の言葉なんです。



私はどうも不思議でね、マルチン・ルッター〔1483/1/10～1546/2/18〕の聖書を買った。それがルッターの誕生日に買った。自分で知って買ったんじゃないですよ。ダンテ〔1265～1321/9/14〕の『神曲』の中山昌樹さんの『詩聖ダンテ』という本を買った。それがダンテの召天の日、9月14日。何か私は星の結びつきというか、そういうまわりあわせにできている男なんだね。

だから、「天」という言葉が好きなんです。

「慕う処は天にあり」

という。藤井先生が兄貴のことを記念して書いてくださった号がある。その表題が「慕う処は天にあり」というこの言葉です。そんなことで、大手町時代、私に言わせると内村鑑三先生の時代です。

●第2期（新町時代1925～）

第2期は新町時代、内村先生の集会继续して往こうと思ったけれども、不思議な導きで私の兄貴の『基督の復活』（小池政美訳、「旧約と新約社」から1924年に出版）というゴーデー〔フレデリック・ルイ・ゴデ（Frédéric Louis Godet 1812～1900）スイスのプロテスタント神学者〕の翻訳をした。それを藤井先生が出してくださった。私はその校正のお手伝いをした。それで初めて藤井先生というのを知ったんです。それで藤井先生の新町の家庭集会に行った。先生はいわゆる伝道は好きじゃないんだね。先生はどちらかというと、内気な人だね。藤井先生に出つくわしたことは、私にはかけがえのないことで、私の恩師というならば藤井先生が恩師です。藤井先生の集会は先程もお話したように、黙示録で始まって黙示録で終わった。私はその5年間、一回も欠席なし。

それで、藤井先生から自分は何を学んだかというと、

「信頼」

という一語です。それに尽きる。藤井先生は神・キリストに信頼し抜いて生きてきた人です。そういう意味では、何と言っても本当に実存の方です。無教会の信仰を私は時々、

「観念」

なんて言うけれども、具体的な先生は観念じゃなかった。

「江戸っ子は宵越しの金は使わない」

と言うけれども、先生は信頼だもんだからね、その日暮らしです。

「先生が亡くなったら財布の中は空っぽだった」

と矢内原先生が言った。4人の子供をどうしてくれるか。

「信頼していたらその先は神様がなさる」

と。先生の著作集が子供たちを育てた。もちろん矢内原先生がお尽くしになったけれども、そういうように素晴らしいです。



「信仰」

でなくて、「信賴」だね——私に言わせると——先生は淡々としていた。

集会は10何人だからね、ろくな人はいないわけだ、我々みたいに。大学生が2、3人。あとはおばあちゃんとか、およそ会員ならざるような会員ばかり。それを広めようとしなければ、そのまま始めから終りまで12、13人。我々も悪いんだよ、誰も人を連れて来ない。そして質問も何もしない。黙って行つて黙って帰る。集会とはそういうもんだと思っていた。大体、先生がおっかないように見えたから。ハートの熱い方なんだけれどもね、なかなか外へ出さないんだ。

まあしかし、藤井先生のところで、私たちは大学生だったから、2、3人の大学生を相手に先生は、ミルトンだ、ダンテだ、プラトンだ、ギリシヤ語だ、ヘブライ語だと、日曜日の午後はそんなことをやって、大体、星が出る頃に帰った。先生は奥さんを亡くしておられたから、帰る時はちよつと淋しそうな顔をしておられた。

だから、忘れることができないです、ああいう時代は。あの頃の野原は本当に素晴らしい野原で、今は全然跡形なし。あそこは天国的な処でしたね。藤井先生の「武蔵野の散歩」という短文がある。ハートに沁み入るような文章です。

これは私の大学時代〔1926～1929〕と卒業して2年位。藤井先生は詩が好きだからミルトン。私は大学ではゲーテ。木村謹治（1889～1948）さんというゲーテに打ち込んだ先生がいる。今でもゲーテ研究では第一人者です。あの大学のゲーテ講義は、私は本当におもしろかったね。それは木村先生の博士論文の下地でありましたけれども、「若きゲーテ」。

ゲーテというのは、

「神——自然——我」

これが溶けている。今のクリスチャンは

「神——キリスト——我」

が溶けなくてはいかん。それは一如の世界。溶け込む世界は「神——キリスト——我」の内在関係、インアイナnder（ineinander 相互相入、内在）の関係。信仰はただそののみ。

「信仰、信仰」

といって仰いでいるから困るよ。漢文の聖書を見ると「仰」の字がない。ただ「信」と書いてある。その方がよっぽどいい。まあ仕方がないよ、「信仰」という字が熟してしまっているから。それはもちろん信仰という字にも大事な意味があります。先ず仰ぎ平伏ひれふさなくたってはいかん。仰ぎ平伏す信仰から魂の交わりの中に入っていく、信じ交わる霊交の世界に入る。これが真まことの信の現実であります。藤井先生が「信賴」と言う。それはもちろんそれでいいんだよ。いいんだけど、実は信賴ではちよつとまだ、

「私の信賴がちよつとまだ足りないから」

なんてことになってしまう。信賴を突き抜けなくてはいけない。



そうすると中に投げ込みの世界に入る。信入していかなくは。「人」の字を裏側に引っくり返すと「入」だよ。表裏一つにならなくては。

「我は人にして入る者なり」

と、おもしろいな。裏も表もありませんと。表裏一如の人となれば、キリストの中に入っていきます。私は楽しいね、こういうのに気がつく。

「信入、信交」

の交わる世界が本当の信である。まことに現^{うつ}である。

●第3期（丸の内時代 1930）

第3期は「丸の内時代」と私が言っているところの、内村先生の信友、直弟子、一番弟子だみんな。塚本虎二。まあとにかく優秀な人ばかりだよ、エリートばかり。塚本先生は何といつても、『イエス伝』研究の権威者です。これは大変なものです。イエス伝に先生は打ち込んだ、この四福音書に。塚本先生の『イエス伝』の右に出るものはないでしょうね。

ただ、それであつても「なお一つを欠く」という面があるから惜しいなあとと思う。それは聖霊の事態が、この福音書におけるキリストの霊の厚みが、残念ながら「欠けていた」。御霊の力で読まなかつたら、その素晴らしさもわからない。

そういう掛け替えのない先生に私はぶつかっているんだよ。内村鑑三先生は預言者、藤井先生は詩人、言葉の深い意味で。『羔の婚姻』の如き詩を日本の誰が書いたか。しかも、日本の詩人集の中に藤井先生はオミット「除外、省く」されているが、そんなもんです。これも「アナテマ」「呪い」の現象の一つだ。いわゆる専門の詩人家からは、詩人の中には入らない。けれども、あれを見たら驚くだろうと思う。ミルトン、ダンテを先生は両方共、自分の詩の中にある意味で生かそうとなさっておられた。

塚本先生は学者です。預言者、詩人、学者に私は出つくわして来た。知情意というね。大雑把にいうと、内村先生は意の世界、藤井先生は情の世界、塚本先生は知の世界。この三人に、ペテロ、ヨハネ、パウロみたいに、それぞれの特色を持った先生に私は相前後してぶつかっているわけです。

●第4期（家庭集会 1940）

私が独立伝道を始めたのは1940年だから、それが第4期です。私の母が失明（1921年9月）しましたから、失明した母をいつも私が手を引っ張って、もう外に行くのが少し難しくなってきたから、私はお母さんに福音を伝えようと思って家庭集会を始めた。それがもともとの動機です。1940年から今日に至るまで続けています。そういうわけで、一応学校の先生をしながらそんな集会をやって来たわけです。



●第5期（聖霊時代1950）

それで手島郁郎君にぶつかったのが1950年。第5期といってもいいですが、1950年11月3日、阿蘇の垂玉の温泉の紅葉が今でも目にありありと映って来ます、あの光景が。手島君の姿も出て来ます。

物凄い祈りの世界でね、女の方が20人余、女性だけの祈り会だったかな。そうしたら、みんな霊歌になっちゃってしまっただけ、それが不思議な調べをもっているんだよ、あんな霊歌は後にも前にも聞いたことがない。その時に私は天から直接に御霊が来てしまった。異言が迸った。それでもう私は大変な聖霊のバプテスマを受けた。

それまで私は無教会で「十字架」を徹底的に学んで来ました。たとえ観念であろうと、単なる観念といったら悪いけれども、とにかく無教会は内村鑑三先生の十字架で生きて来た。もちろん聖霊も火花してました。でなければ、あれだけの文章は出てこない。

そういった十字架の土台があったから、私が聖霊のバプテスマを受けたのは健全な道であつた。皆さんも十字架抜きには、聖霊はこない。聖書がそうだもの。ペテロも、ヨハネも、ヤコブも、この直弟子たちがキリストと一緒に御飯を食べた時は聖霊は来なかった。

「しかし、待っている。今にお前たちを本ものにしてやる。十字架を私が通つたら、今度は聖霊が来るぞ」

と。だから、十字架ぬきには聖霊は来ない。十字架ぬきの

「霊だ、霊だ」

なんて言つて浮いているような聖霊はダメだ。下手するとサタンが入つて来る。霊が切り換わってしまうから。切り換わる心配のないのは十字架が土台になっているから、私はちつとも心配しない。そこにちゃんと十字架が来ているから。皆さん、これだけは身につけていなくては。

「十字架といえば聖霊、聖霊といえば十字架」

と、こういうことになっています。そういうことを本当に体験しなければ、体験させられなければわからんよ。だから、

「人に誤解されたつて無理もないよ。それで誤解されなかったら、お前はまだまだダメだよ。誤解するなら誤解しろ、わからなければそれで結構だ」

と、逆に言いたくなる。

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

とお釈迦さんが言つたそう。

「それはお前が体験するまでは、いくら聴いていたつてダメなんだ」

と、こういうわけだ。キリストは不親切だよ、説明しない。

「聞く耳ある者は聞くべし」

なんて、聞く耳ない者は仕方ないよ。本当の親切というのは、ちよつと不親切なんだ。突



つ放す。今はちょっと過保護なんだよな。

本当の魂の教育は、家庭から始まらなければいけない。お父さん、お母さん、兄さん、姉さんが、妹や弟をみてやる。これが一番難しいんだ。キリストも誤られてしまった。そういうことで、他人ごとじゃないですよ、みんな我々一人びとりの直々の問題です。日本の問題は我々一人びとりの直々の問題。何がどうあれ、制度の問題じゃない。もう自分自身が活ける法則とならなければ、それを切り開いていく人にならなくては。どんなところでも見えざるところの不文律の法則を、靈法を展開していくような人にならなくては。

札幌農学校の生徒たちが、学校の生活規則をといつて何箇条かつくつた。だが、クラーク先生は、

「そんなものは要らん。『ビー・ジェントルマン！』『Be gentleman！紳士であれ！』」

これ一つでたくさんだ。ジェントルマンであれ、このことを身に体して行け。規則は要らんぞ」

と。さすがにクラーク先生だね。一人ひとりが「ビー・ジェントルマン！」と。昔の「ジェントルマン」という言葉は非常にそういった意味を持っている。

“Be ambitious in Christ !”

「キリストに在つてアンビション〔大志〕を持って！」

と。とにかく、そういう気魄の人間が出てこなければダメなんだよ、正直。皆さん一人ひとりがそうならなくては。たとえ滅びても滅びない、神の国は。

「取るなら取れ、なお神の国は我々のうちにあり」

と、マルチン・ルッターが宗教改革の進軍の讃美歌を作ったでしょ、

「神の国は汝らのうちにあり」

という。

それで、私が『旧約知識』という雑誌に——塚本先生のグループの雑誌ですけど——それに私が「詩篇」「詩篇研究、自由訳」を書いたら、手島さんが、

「先生のものだけは本当に読んでいる」

と言つて評価して、

「先生に会いたい。一緒に集会をしたい」

という手紙をよこしてきた。けれども、向こうもさる者でありますから、いろんな事に失敗して、山に籠もつて祈つて突破した人ですから。まあ人間は違うからね、私は一緒にはいりませんけれども、手島さんにある大事なものはちゃんと見ている。

人間はそれぞれである。パウロはパウロ、ペテロはペテロ、ヤコブはヤコブ、ヨハネはヨハネ。皆それぞれの特色を持っている。それがズレてしまつたらダメなんです。それぞれの色をもちながら、それで争うかという争わない。なぜ争わないか。元が一つだから。キリストという元があるから。源泉があるから。



ところが、それを外側から調整して、

「一緒にやりましょう」

と、ダメだよそれは、無意味だ。それぞれでんでんにやっていたらいい。それを一つにまとめて大調和にしているのは神様なんだ。一人ひとり一つ一つが本ものなら、神様は必ずそれを大調和にしていらっしゃる。問題は、

「その特殊性において本ものが展開しているか」

だけが問題です。

「礼拝のやり方、聖書の語り方、やれ何のかんの」

と、そんなことはみんな御勝手だ、好きなようにやったらいい。

「教会の、無教会の」

と、へったくれもないんだ。

「無教会」

と内村先生が言えば、

「無教会主義」

なんて、イズムに変えるからおかしなことになる。福音はイズムで限定できません。超イズムの世界です。人間は小さいから、それぞれの特殊性においていろんな把み方、表現の仕方がある。それをゴタゴタ言う必要はない。そんなことは枝葉の問題です。問題は、

「破れ器の、ゆがみ器の中に金剛石が、天来の光が宿っているか」

だけが問題。その一番大事なものを、これをいい加減にしておいて「何のかんの」とやっているから、いつまで経っても始まらない。

我々は溶けている。そしてお互いのために祈っている、執成しの祈りをしている。それが一番健全な霊です。そういうことは御霊が来ないとわからないんです。

「小池はちよつとおかしい。藤井先生の信仰からズレてしまった」

なんて。他の先生や友人にみんな私はアウトサイダー「部外者」にされてしまった。いいよ、私は一人でやっていきます。

皆さん、私の気合がわかるでしょうね。私は主観的な気持を言っているのではないんだから、突き抜けているんだから。

「無」

だから私は遠慮なく言える。それが無でなかったら言えないです、自己があつたら。私は死に至るまで無を語って行くから。

そういう手島君という霊的な御霊の人物に出つくわして、一緒に集会して、それで私が決定的な一つの展開を始めた。これが第5期。それで1950年から『曠野の愛』というプリント誌を始めた。仕様がなない男だから、ちゃんと定期的に書けない。



●第6期（アナテマ時代）

それから第6期。「アナテマ」「呪い。無教会から退けられる」になってしまった。正直、曠野の旅だ。今日は旅の話だから。

申命記32章10節、

「¹⁰エホバこれを荒野^{あれの}の地に見これに獣の吼^{ほゆ}る曠野^{あら}に遇い環^{めぐ}りかこみて之をいたわり眼の珠^{たま}のごとくにこれを護りたまえり

人間の目の玉の中には相手の姿が映るでしょ。その眼の珠のごとく守ってください。

¹¹鵬^{わし}のその巢^{すびな}を喚起^{よびおこ}しその子の上に翱翔^{まいか}のごとくエホバその羽^{のべ}を展て彼らを

載せその翼をもてこれを負いたまえり

という。私は聖書の中で大好きな句の一つです。こういう句に出つくわすと、もうやり切れないね。

¹²エホバは只独^{ただひとり}にてかれを導きたまえり別神^{あだしがみ}はこれとともにならざりき」（申命記32・10・12）

人に退けられて、キリストがいよいよ私は親しくなつて来ました。1950年の晩秋からいよいよ私はそうなり、そして聖霊を受けた。その前に私は——無教会には神学がないから、神学を嘲つてゐるから——佐藤繁彦先生〔1887～1935。牧師、神学校教師。日本におけるマルチン・ルターの研究の開拓者〕のルッターの『ロマ書根本精神』（『ローマ書講解に現れるルッターの根本思想』1933年）という本を大学時代に読んで、非常に打たれたね。

「素晴らしい。神学というのはこんな情熱があるのか。よし本当の神学をしたい」

と、私は思った。無教会はみんな、

「神学をやっていると信仰がおかしくなる」

と言つていた。ルッターの神学はいわゆる「組織神学」ではない。パウロの中には生きた神学がある。ルッターの神学も、その性格の神学なんです。彼はカルビンみたいに組織的には書いてない。カル빈は組織神学だ。ちょうどカトリックのトーマス・アクイナスみたいに、これはプロテストタントとカトリックの双璧だもん。それから現在においては言うまでもなくバルトです。

まあそれで、とにかくやつて来ました。家庭集会みたいなものを武蔵野で。私はこういうドラマティックな男だもんだからね、私に蹟く人がある。会員は出たり入ったり。しかし、今いる御連中は全く一つだ。それは聖霊がみんな来てしまっているから。そして思い思いに幕屋を始めたりいろいろです。これは分裂じゃない。展開です。そうして一緒にやつて行くわけだ。これが本当のエクレシヤの姿だと思う。

●第7期（著作集出版 1975）

それで1975年当たりから第6期から第7期に入つて、『無者キリスト』（著作集第一巻



1975年刊」を出版した。この著作集に入ったのが私の一つの戦いの狼煙のろしなんです。

やがて第8期というか、来年の春はそういう時が来そうであります〔註：1979年3月に10年間勤めた獨協中学高等学校校長を退職〕。もう私は上からの命令によって決意していますから、あんまりはつきりしたことは今、言わないけれども、内側ははつきりしている。その前哨の集会が8月20日のロマ書9章の1〜3節を語った、「アナテマ・ガイスト」の一文です〔武蔵野日曜聖書講筵1978年8月20日「アナテマ魂」（ロマ9・1〜3）。『活けるキリスト』153号1978年11月号。本文庫に掲載〕。そのアナテマの独和対照の一文もさることながら、その後に出ているこの一文、これは私の遺言と言つてもいいような一文ですから、よく読んでください。内村先生が英和短文を『聖書の研究』に掲げておられたが、何か知らんけどそういうことになってしまった。

●第8期（詩作1979）

そういうことで、やりますよこれから。私の人生の、ちょうど74歳だから、人生の旅路の夕暮にさしかかっている。もうじき星が出て来る。星空の下を歩く、徹夜して。これが私の最後の、来年の春から多分始まるところの、星空の下を歩く人生の最後の段階、ラスト・コース。そして徹夜して歩いて来世の曙あけぼのを迎えて天界へ往きたいと思つている。これだけ、自分のダメさ加減にもかかわらず、神様の恩寵に斯くもあずかつて、この福音を一人でもつて伝えないでどうするか、ということになってしまった。

そんなわけで、私を見た人が、

「なぜ、あの人はあんなに元気があるのか」

と驚く。私は本当の上からの元気が来ているから、キリストという元の気を、原始力を戴いている。健康法なんて私には一つありませんよ。言うなら健康道、健康の道なんだ。

「我は道なり」

という。我は道なり、路なり。私は今、自分の過去の信仰の歴史を語りましたけれども、皆さん一人ひとりはそのういった歴史を持つていらつしやる。私の事を聞きながら、あなた方は自分の過去の歴史を思つていらつしやると思いますが。

そうすると今日に来た。今日、この瞬間に来た。

「本当に瞬間をつかまえる人が本当の人間だ」

という。大事な瞬間は逃してはいけない。そこには永遠の質があるから。キリストの原始力が我々の魂と身体の秘訣なんです。その他に健康法なんてありやしない。

それで第十卷〔著作集第十卷『聖書は大ドラマである』1988年刊〕を終つたら——問題は量じゃない、質なんです——珠玉の金剛石みたいなものを一つ作ればそれでいいんだよ。余計なものをたくさん書く必要はないんだ。聖霊は芥子種の如し。

「芥子種の信あらば、この山に移れと言えば動く」



なんてキリストは凄いことを言う。我々が芥子種一粒の信となる。原始力の凝結したものとなる。キリストの原始力がこの胸三寸のうちに凝結して、キリストの心臓となることです。

●第9期（詩『神の幕屋』出版）

それで第9期がある。最後の課題がある（註…遺稿『靈界の星々』（神の幕屋人物詩伝）1998年8月刊）。それは言わないでおこう。そうしたら、サヨナラしたいわけだ。それまで私は使命があると思っている。どの道、地上で完成すると思ったら大間違い。ミケランジェロは最後のところは鑿^{のみ}を捨ててしまった。脚が全部できてなかったりする像がある。それからまだ石が残っているような。むしろあれがいいんだ、あの未完成の姿が。地上で完成したら大したことないよ。未完成でこの仕事は限りなく進んでいくという姿が、未完成の本当の姿。完成を嘆いている姿じゃない。完成なんていうものは地上ではわからない。無限なる内容は途中で筆を折ってしまう。地上の完成の姿ではない。神様が向こうで本当に完成なさる、我々を全きに。

「終に^{つい}キリストの姿に化するなり」

というのは向こう側の話。地上では三日月で満月は向こう側の話。しかし三日月は光っている。完成の質を持っている。質を持っていない未完成なんてものはダメです。無限無量なる内容を持っている未完成の姿が、これが本当の姿なんです。

キリストは地上でもって30年位の生涯でもって往ってしまった、向こうへ。けれども、その地上の終りの3年か4年位の、それで世界中の誰もできないことを、また世の末までもこれと比較することのできない、そういう実存を投げかけて行かれた。「完成」なんていう言葉では表わせない。

「父の全きが如く」

というけれども、

「父の無限なるが如く、汝らも無限なれ」

とおっしゃっているのと同じことだよな、「全き」なんていう言葉は。それを形で表す場合、円の他にない。円環、

「円現」

です。それで、私は地上を、人生の最後の夜空の下を歩く時代を、これから迎えるわけですが、^{あかつき}暁を望んでね。皆さんもいろいろな描き方があるでしょう。かけがえない歴史は、いわゆる書かれたる歴史でない。あなた方の生涯そのものが活ける文字として天界に映る。それが本当に楽しい旅になる。

●詩篇84篇

詩篇84篇に入ります。



1 万軍のエホバよ、なんじの帷幄^{あけぼり}はいかに愛すべきかな。

2 わが靈魂^{たましひ}はたえいるばかりにエホバの大庭をしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ぶ。

3 誠やすずめは窩^{やどり}をえ、燕子^{つばくらめ}はその雛^{ひな}をいるる巢^ねをえたり。

万軍のエホバ、わが王、わが神よ、これなんじの祭壇なり。

4 なんじの家にすむものは福^{さいわい}なり。

かかる人はつねに汝をたたえまつらん。

5 その力なんじにあり、

その心シオンの大路にある者はさいわいなり。

旧約ではもちろん「シオン」はエルサレムです。我々がキリストの光でみる時には天界のシオン。これを「新シオン」と言おうが何と言おうがいい。黙示録の終りにあつて、川が流れ、十二の木が生えたり、都大路があつたり、そういったシオンの、神と羔^{こひつじ}のいらつしやるところと象徴的に言われているわけです。そして明かりを灯す必要がない。羔そのものが光、明かりであると書いてある。神殿であると書いてある。

「日月の照らすを要せず、キリストが光である。また宮のあるのを要せず、キリストが活ける神殿である」

と。素晴らしいね。本当の突き抜けた聖霊が来ている。力の源泉、それを

「原始力」

と私は今書いた。神・キリストという原始力です。

「その力は汝にあり」

というのは、汝の中にある力を自分に載いていることを、「その力汝にあり」と言っている。「その力汝にあるものは」というと、これは三人称なんです。

「その力汝にある私は、」

と皆さんは一人称で読んでください。その力を汝に載いている、汝の中に力を載いている。

「汝の力を載いているこの私は恵福^{さいわい}なるかな」

と、皆さんはそう響いて読まねばならない。

場所的にいえば天界、天のエルサレム、天のシオン。これを単なる憧れと言つてはいけませんよ。これは希望の彼方、希望のシオンです。しかしながら、希望は同時に現実なんです。本当の希望は上から来ます。だから、

「汝にある我々は恵福^{さいわい}なるかな。この地上を歩くのが、まるでシオンの大路を歩くが如し」

と、こういうわけです。否、未来を現在にし、天界を地界にしてしまう。彼岸を此岸にしてしまう。そういう図太い信仰です。だから、

「天地一如、未来現在一如」



と言いたくなるのはそういうことです。過去・現在・未来という歴史を持ちながら、いつも現在において集中している。焦点を持っている。

●「人生の歌」（ロングフェロー）

ロングフェロー（ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）1807～1882）の有名な「サーム・オブ・ライフ」[A Psalm of Life「人生の歌」]の一句です。

「未来というものを当てるな、

どんなにそれが快くみえようと、

死せる過去を捨て、その死を葬らしめよ」

「楽しからん後の日をたのむ勿れ！

逝きし死をして死を葬らしめよ。」

これは、

「死者をして死者を葬らしめよ」

というあの言葉から連関して書いた詩句だね。けれども、「死者をして死者を葬らしめよ」とは間違いだ。あれば、キリストはもともとアラミ語を語られたので、アラミ語の「ミッタ」「死者」という字と「マッタ」「葬儀屋」という字を言われたのを、ギリシヤ語にするときに、これを両方とも「死者」「ミッタ」に直してしまった。片一方は「葬る者、葬儀屋さん」。

「死者は葬儀屋さんに任せなさい。お前は神の国を伝えろ」

と、キリストは当たり前前のことを言われた。

「今、活ける現在、これに行動せよ、

「働け！ 働け活現の今！」

ここで生きろ、本当に行為せよと。

心はわが内にあるではないか。

神様は頭上にいらつしやるではないか」

「^{うちこころ}衷に心情あれ、上に神在ませば！」

と言っている言葉です。けれども、「ハート・ウィズ・イン」ではない。これは「スピリット・ウィズ・イン」と言いたい。

「聖霊はわが内にあり、キリストはその頭上にあり」

と。けれども、これは単純な意味で、「ヒューチャー」「未来」と言っているけれども、「ヒューチャー」も「プレゼンス」「現在」にしてしまう。未来をも現在に化してしまう。キリストが、また使徒たちが語っていた現実、もう神の国、終末の時が間近に来ているという、

「その時にまだ生き残っている者がいるだろう」

なんてキリストは言われた。けれども、神様は

「ちよつと待て」



と言って、二千年も延ばしてしまった。だが、終末の歴史の終りは質的にはいよいよ迫っている。質的に再臨はいよいよ迫っている。これはキリストの時代より、いよいよ迫っているわけです。だから、私たちは本当の望みを、

「今にも神の国は来る」

といって、その準備をする。毎日毎日がその準備態勢。毎日毎日を徹底的に天国的に生きる。毎日毎日をパラダイスとして生きるということです。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

という現実を生きること。終末の世界を、黙示録の最後の世界を待つ、本当の待ち方です。だから、

「いつぶつ倒れても、アーメン、ハレルヤ！」

というわけだ。どうぞ皆さん、それだけ烈々たる魂になってください。

今日から聖霊は火だ。昨日までは泉だったけれども。烈々たる熱泉、また烈火。それは何も炎を発していなくてもいいですよ。炎を発する時は発したらいい。深く、静かに燃えている魂。そうして追求してやまない。来ているから。

「いよいよ化しながら、いよいよ求めながら、

働くことを、身をもつて学び、そして神の国を待て」

〔愈々達しては愈々追求め 働くを学び、待つを学ばん。〕

〔註：「」内は小池訳（著作集第8巻『詩歌集』より）〕

と、ロングフェローの奥を言えば、そういうことです。

このような原始の力を、キリストという力を戴きながら進んで行く。

●生きる望み

6 かれらは（われらは）涙の谷（バーカー、水のない谷）をすぐれども、

「彼らは」ではない。「我らは」です。時々、私は本当に何ともいえない涙が出てくる。腸の中に流れてくる。説明できない。

其処をおおくの泉あるところとなす。

キリストを持つ者は、何を持つよりも一番豊かであるということです。渴いているところに水が湧く。暗い処に光が射す。レンブラントの絵がそうだ。

また前の雨はもろもろの恵をもて之をおおえり。

どんなに渴いても、どっこいそこから泉が湧く。私たちは行き詰まりを知らないことになりす。

7 かれらは力より力にすすみ、

遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ。



「我らは渇きの谷をすぐれども、其処をおおくの泉となすことができます。われらは力より力にすすみ、遂におのおの天界のシオンに至つて、神・キリストにまみえます」

と。我々の旅路は、やがて天界において神・キリストにまみえる。あなた方の知っている人たちが、この世を去つて天界へ往つた人がおありでしょう。小さな子供を亡くした方もおられる。大丈夫、向こうで育っています。いろいろな涙の経験を通つて歓喜の現実を、天地相應えて進んで行く。信仰はそれだけの、涙の深い人には逆に歓喜の希望は力強くなつて来ます。喜びのおとずれとは、なぜ喜びのおとずれか。

「ワッショイ、ワッショイ」

で喜んでいるのではない。キリストほど深い涙を持った人はいんです。けれども、キリストほど驚くべき喜びを持つている人もない。だから、私はドラマティックだと言ふんです。ベートーヴェンは、大勝利に終わるところの、大讃歌に終わるところの、第九シンフォニーに次ぐ第十シンフォニーを考えていたという。十字架のシンフォニーだよ。第十シンフォニーは天界で歌われている。ヘンデルの「メシヤ」以上の大讃歌が天界には歌われている。世界の歴史は神の旅である。結局、新天新地に向かつている。私はこの新天新地の希望がなかったら、もう生きる望みを失うね、正直。

「空の空なるかな、凡て空なり」

と、コーヘレスと共にそう言いたいね。ところが、最後の黙示録が、藤井先生のところで黙示録22章を最初に、最後に黙示録22章を聞いたということとは、どういうことなんですか。円現している。何か知らんがそういうことになっている。ただじゃ済まないよね。

「力より力にすすみ」

という。パウロは、

「栄光より栄光へ」

という。

「信仰より信仰へ、恵みより恵みへ、讃美より讃美へ、力より力へ」

と。みんなこれは同じことをいろんな言葉で言うわけだ。皆さん一人びとりがみんな証者なんです。聖霊が来たらもうしょうがない。これは何ものとも換えることができない。

その「力より力へ」というのは、

「聖霊より聖霊に至る。いよいよ聖霊を受けとつて行く。御霊を受けて、いよいよ

御霊を受けながら進んで行く」

ということですよ。これはもうパウロがコリント前書1章、2章のところで徹底的に言っている通り。また12章、14章のところであのように、

「この御霊は我々の心や、生まれつきの霊ではわからない。神の真理は御霊を受けると自然に展開してくる。言葉も行為も全部そこから来ている」



と。非常に愉快な言葉です。

「聖霊の力より聖霊の力に進み、遂におのおのそれぞれのつぴきならない人生の旅路を歩かしめられて、そしてシオンにおいて万才、ハレルヤ！」
というわけです。

●聖霊の幕屋

8 万軍の神エホバよ、わが祈をききたまえ。

ヤコブの神よ、耳をかたぶけたまえ。

こういう角度から祈ったら、もう神様は祈らない前から聴いてくださる。

9 われらの盾なる神よ、

みそなわしてなんじの受膏者^{じゆこうしや}の顔をかえりみたまえ。

不思議なことが書いてあるね。「受膏者^{じゆこうしや}」とは

「御霊を受けた者」

との意です。特別の「メシヤ」のこととも言うさ。けれども、我々もみんな受膏者だよ。聖霊を受けた者、「クリストス」、同じことだ。みんな

「小キリスト」

ですよ。

「御霊を受けた者、御霊なる信者の顔を顧みてください、名前を呼んでください」という。

10 なんじの大庭にすまう一日は千日にもまされり。

「一日は即ち千年である」とまでペテロは言いました。

「千年は一日の如く、一日は千年の如し」

ということは、永遠の質を持っているということです。キリストを持つ者だけが永遠を持つているんですよ。時間的に永遠なんてものを考えたってどうにもならない。地上の人生は何年であろうといい。

何といつてもキリストの一番近くにいるのは幼児です。

「^{おさな}幼児の如くならずば天国には入れない」

天界の一番キリストに近いところには幼児がいる。

われは悪の幕屋におらんよりは寧ろ^{むし}

わが神の家の門守^{かどもり}とならんことを欲^{ねが}うなり。

この地上のことを「悪の幕屋」というんです。皆さんはみんな「聖霊の幕屋」を構成する。

「二、三人わが名によりて集まるところに我もあるなり」

という、そのキリストの言葉が「聖霊の幕屋」を一言で言った言葉です。

「汝の受膏者たる私たちをどうぞ顧みてください」



と。信賴に満ちた言葉です。

「あなたの大庭にすまう一日は千日にもまきつて、あなたの大庭はこの幕屋の中にあります。幕屋があなたの大庭です。その一日は千日にもまされり」

と。我々はそういう一日を昨日から今日にかけて送っているわけだ。そうして、今度は「悪の幕屋」に出て行く。何処に行っても何の隔てなく溶かしていく。それを光で包んでしまう。そういう存在になる。

神様と私たちの関係は絶対関係です。神—キリスト—我。人間関係のA、B、Cの関係は比較を絶した絶対性を持つている。みんな十字架という中心を持つている。AとB、BとC、CとA、どの関係をもつてきても、このキリスト「X」の線を持った間接の関係「XA、XB、XC」において絶対性を持つている。だから、AはBとCを比較してはいかん。Bと交わる時、Cと交わる時は、それぞれの特殊性、絶対性を持つている。それが人間関係というもの。これは「神・キリストとの」縦の関係を持たなければ成り立たない。

人間性の間をどんなに直接的に仲良くしようとしたってダメだよ、人間は。キリストの十字架によって互いに忍び、互いに赦し、互いに信じ、互いに愛していく。

「汝ら相愛せよ」

というのは、そういう幕屋です。地上の「悪の幕屋」はキリストという十字架の大黒柱を持たないからおかしなことになる。そして幕屋空間は全部聖霊が満ちている。

●旅は道伴れ世は情け

「それは神エホバは日なり盾なり。」

エホバは恩と栄光とを与え、

直くあゆむものに善物をよきものをこばみたまうことなし。

はい。これを新約の光でみると、

「神様は、キリストは本当の愛と、そのキリストの栄光とを与えてくださって」

と。「直くあゆむ」とはキリストと義の關係に立つことです。

「信仰によつて義とされる」

という言葉があるが、このキリストと直結の關係に立つのが義であつて、それでなければ直く歩めない。

「汝の聖意を成させ給え」

と言つて歩いているのがこの直き歩み方です。だから私は、

「自分を無にしろ。いや十字架で無にされている。無き者にされているから、今、我執が無くなっているから、自由自在である」

と言っている。

「善物をよきものをこばみたまうことなし」



と。「聖霊をこぼみたもうことなし」と、新約の光でそういうことになってしまふ。聖霊だけが絶対無条件の「善物」^{よきもの}です。

¹² 万軍のエホバよ（キリストよ）、

なんじに依頼む（投げかける、投身する）ものは（我らは）さいわいなり。

しょうがないね、これ。詩篇の奥を読んじゅうから。何と言ったって詩篇は詩篇、旧約の世界です。だから、その中にキリストの霊が入って来なければ、これを本当に読めない。何か欠けているなあと感ずる。要するにキリストの霊、キリストの愛です。

それで、我々は独りで旅をしているんじゃない。そのようにみんな旅をしている。

「旅は道伴れ世は情け」

という。一緒に時々休んだり、そういうわけですよ。我々の旅路は互いに本当に助け合つて行くわけだ。これは原始力が来ているからできるんです。そういう、

「山路越えて」

の一人旅。また幾人かで一緒に旅している。いろんな場合がある。

どの場合においても結構でございます。たとえ一人であろうとも、また幾人かの人でも、みなゴールイン。天国の門が閉じる時に、私はしんがりになって入って行くとおもう。他の人たちはみんな光に入って戴きましよう。そういう荷いの気持で行くわけだ。

A1「わが道伴れ」（1976年2月21日作 讃美歌527「わが喜びわが望み」の歌調で）

1 わが道伴れ わが情け

わが旅路の主よ

なやみにも 苦しみにも

わが力の主よ！

2 わが道伴れ わが情け

わが天路の主よ

山を越え 谷を渡り

偕に進みたもう！

3 わが道伴れ わが情け

世の救いの主よ

わが身をも わが魂をも

捧げつつ進まん！

4 わが道伴れ わが情け

旅路の峠を

幾たびも 越えに越えん

幾たびも 天翔ける日まで！

これは私が作った歌ですけども、そういうようにして、我々は本当にこの地上の旅を悔いなき旅として行きたいと思います。終ります。

